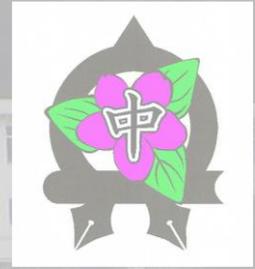


協働



教育は感化である

副校長 石井 淳

「我々大人も大いに自らを語り、寄り添う姿勢とふれあいをもって、お子様達を育てていこうではありませんか。」これは、学校だより『協働』第4号（7月18日発行）で本校校長が書いた文章の一節です。これを読んで私の頭に浮かんだのが、表題の言葉です。以前お世話になった、ある校長先生が仰った言葉で、副校長となった今でも常に意識している、私の教育観です。

まだ30代前半の頃、少々落ち着かない校内事情の学校に勤務していた時の話です。私も今よりいぶん血の気が多く（髪の毛も多く）、少々ヤンチャな生徒たちと日々奮闘していました。なかなか言うことを聞かない生徒たちに対して声を荒らげることも度々ありました。どうしたら言うことを聞かされるかと悩んでいたときに、ベテランの女性の先輩教員が声を掛けてくださいました。「こうしなきゃ、させなきゃと思うとお互い苦しくなる。その生徒に今何が必要なのかと考えると楽になる。」という内容でした。その先輩は、自分のクラスの手の掛かる生徒たちを常に毅然と指導しながらも、職員室では「こんなことがあったの」といつも笑いながら話題にされていました。あんなに大変そうなのになんで笑顔で話せるのだろうという、以前から抱いていた疑問の答えを得た瞬間でした。さらに先輩は、心のもち方の秘訣として「自分の心の枠を広げる」ことを教えてくださいました。心の枠が狭いうちは枠の外にある人の行動が許せないが、枠を広げるとどんな人も枠の内側におさまり、自分の価値観を曲げることなく自然と受け入れられるようになるという考えでした。そのときの感想を一言でいうなら「衝撃」です。自分の教員としての度量の小ささと視野の狭さを指摘された思いでした。それらの言葉を頭の中で何度も反芻しながら、少しずつ理解し、納得しかけたときに、それまでの私たちのやりとりを見ていた校長先生がおっしゃったのが、「教育は感化である」という一言でした。

今考えると、私の指導方法に助言をしてくださったというよりも、私の心の中を表現されたのかもしれない。実際、その頃の私はその先輩の言動に感銘を受けることが多く、こんなすごい教師に自分もなりたいたいと思い、多くの場面で先輩を真似していました。まさに私自身が先輩に感化されていたのです。

いずれにせよ、校長先生の言葉は先輩教員のアドバイスと共に強烈に心に刻み込まれ、以来、私の教育哲学となりました。このことは、私の教員人生において、自分の教員としてのスタイルを確立していく大きな出来事でした。

「教育は感化なり」は夏目漱石の言葉としても伝えられています。漱石は、教育が単なる情報の詰め込みではなく、人間性や道徳性の形成に大きく関与すると信じていました。また、生徒に良い影響を与えるためには、教師自身が理想的なモデルとならなければならないとも主張しています。

私自身が模範的な大人かどうかはかなり疑わしいところがありますが、理想的な大人であろうとすることは重要だと感じています。そのことにより、大人も子供も互いに人生が豊かになると信じ、これからも教育に携わっていきたいと思います。